

二〇二二年七月一四日

追ひかけて追ひかけられて水鉄砲
浜木綿や波音高き日本海
たもとほる祇園囃しの楽に乗り
夏草や塩田跡の匂ふなり
ペダル踏みゆけば涼風頬を撫づ
ブナ大樹涼しと幹に耳をあて

二〇二二年七月一三日

里山も揺らげとばかり青嵐
丘の上の一揆の碑へと青田風
羅や襟足白き京女
遊子吾も結はせて貰ふ祭紙垂
瀬の楽に和してそよげる合歓の花

二〇二二年七月一二日

リフトいま紫陽花の山のぼりけり
祇園囃子都大路のおちこちに
湧池の深淵見えぬ木下闇
無事に立つ銚に喝采京大路
一溪の風にそよぎぬ合歓の花
朝涼し菜園に人混みにけり
山寺のしじまを破り牛蛙
声援に応ふヒーロー玉の汗
黒南風や帆柱きしむ舳ひ船
京なれや碧眼乙女らも浴衣

二〇二二年七月一日

足跡を消すは渚の青葉潮
向日葵を手向けて墓の彼悼む
無縁墓寄せて塚なす木下闇
雲払ひ長刀銚の建ち上がる
蜻蛉生れ川面に影を散らしたる
カンナ咲く軍人墓はみな高し
白南風に髪なびかせて朝散歩

あおい 三刀 なく子 治男 花茗荷 ともえ 三刀 満天 菜々 よし子 美咲 満天 とうち とうち なく子 うつき さつき 有香 なつき わかば 菜々 宏虎 せいじ ぼんこ 菜々 さつき とうち こすもす

夕暮れの谷間に合歓の花明かり
長老ら意気軒昂や銚立つる

二〇二二年七月一〇日

月涼し椰子葉影の砂浜に
手を浸す河原の涼し五十鈴川
畳の間なるが馳走や大昼寝
胡瓜茄子漬けて話題の塩麴
越して来し隣家に菊の挿し芽銚
遠山は煙雨隠れやほととぎす
朝市に並ぶ胡瓜に個性あり
梅雨の蝶兵士の墓を離れざる

二〇二二年七月九日

夏来れば逆縁の吾子想ひだす
庭に摘む葉味とりどり冷奴
廃校の母校を訪へば草いきれ
故郷の川の匂ひの鮎届く
打水に映ゆる老舗の石畳
素語りの稽古見えぬし青簾
千枚を駆けめぐりをる青田風

二〇二二年七月八日

夏菊を手向けて母の忌を修す
大橋の脚にぶつかり卵波立つ
芋の葉にまろびし朝の露の珠
滝壺の渦抜けてより水寧し
梅雨はげし鈍る体を動かしぬ
七変化遠山はまだ梅雨の奥
緞帳のごと山覆ふ梅雨の雲
母の忌や遺愛の合歓の花開く
青畝師の句碑を好めるとんぼかな

有香 なく子

宏虎 百合 うつき なく子 こすもす とうち 満天 ぼんこ

あさこ きづな 菜々 うつき よし子 雅流 宏虎

三刀 わかば あさこ 宏虎 英子 とうち せいじ 有香 よし女

毎日句会みのる選・二〇二二年七月一八日